

標茶町立標茶小学校 フィールド学習 実施内容

《概要》

[日程] 2017年9月5日(火)

[参加者] 5年生児童55名

[講師・案内] 寺内 聡(環境省)、山本泰志(北海道環境財団)

[フィールド学習の目的]

標茶高校のフィールドで目にした、生き物、川、林などの様々な要素が、眼前の雄大な湿原景観に広がっていることを体感し、地域の誇りとして湿原を捉える気持ちを育む。また、流水により大規模侵食された河川での活動を通して、湿原に起こっている問題や近年の変化を知り、自分たちは湿原をどうしていきたいか考えるきっかけづくりを行う。

[実施プログラムの概要]

8:50 小学校出発

9:30 二本松展望台でのフィールド学習

10:15 スガワラカヌーポートから湿原を流れる川の観察

11:00 久著呂川(中久著呂地区)の侵食箇所を観察

12:25 小学校帰着

《実施内容(記録)》

■小学校を出発(8:50)

担任よりスタッフを紹介。標茶町のバス車庫前に移動。

■クラス毎に2台のバスに分乗し出発(9:00)

移動車中にて、本日の活動概要を説明後、車窓から見られる風景を見ながら適時説明。

○シラルトロ湖周辺

湖に繁っているのは、ヒシと言う水草。かつてはここまで繁っていなかったそうだが、この10年程で湖を多いつくす程増えてきた。この水草は根が湖の底とつながっているため、深いところには生えることができない。水面を覆っていないところは水深が深いのかもしれない。増えてきた理由としては、湖の水に栄養が増えてきたからと言われている。湖の栄養分が増えたのは、私たちの生活とも関係しているのではないかとされている。

○道沿いのオオハンゴンソウ

道の横に黄色い花が咲いているが、あの花は、元々は北海道にはなかった花で、外国から持ってきたものが自然の中で増えたもの。湿原に咲く花に関心を持った子が多いと先生から聞いているが、あの黄色い花は、元々この地域に生えていた花よりも増える力が強いので、湿原の中でも増え始めている。そうすると、元々湿原に生えていた花が減っていくということも起こってしまう。今向かっている展望台のすぐ横では、皆でこの花を抜いて数を減らそうという活動も行われている。



○塘路湖周辺

先ほどの湖よりも大きい。湿原には大きな湖が3つあるが、どれも湿原の東側に集まっている。流れる水の働きを理科で習うと思うが、水は高い方から低い方に流れる。この湖の水も高い場所から流れてきてへこんだ場所にたまっている。釧路川も湿原の東側を流れている。これらのことから、釧路湿原は東側の方が低く少しだけ傾いているということがわかる。元々は今湿原がある場所は海だったと言われていて、地球の気温が今よりも暖かだったので、地球にある氷が今よりも少なく、海水の量が多かった。少し気温が下がってくると氷になる水が増えるので海水の量も少しずつ減って、海面が下がってきた。その時にへこんだ場所に海の水が取り残されたのが、この3つの湖のはじまりと言われている。塘路湖には元々海に住んでいたエビの祖先が住んでいるそう。



また、3つの湖で漁師さんがいるのは、この塘路湖だけ。漁師さんは湖の魚がいなくなったら困るので、魚がいなくならないように湖の魚を守りながら、魚を獲っている。

■二本松展望台にてフィールドワーク (9:30)

バス降車後、クラス毎に二本松展望台まで徒歩で移動。



○湿原景観を見ながら、釧路湿原についてお話。

小学校の近くに釧路川が流れていると思うが、町の中を流れる川と比べて形や周囲の景色が違うことがわかると思う。町の中を流れる川は比較的まっすぐだが、ここから見る釧路川は曲がりくねっていることがわかる。川の両岸にはハンノキという木が繁り、木の高さが高くいっぱい立ち並んで生えている場所もあれば、まばらで木の高さも低い場所もある。草原にも色が違って見える部分もあると思うが、ヨシという草が多い場所、スゲという草が多い場所など、生えている植物にも違いが見られる。このように、湿原には色々な環境があり、そこに多くの植物、動物が住んでいる。



○奥の林から見る釧路川を観察後、バスに戻る



■スガワラカヌーポートから湿原を流れる川の観察（10:15）

バス内から道の真横を流れる釧路川を観察。大きく蛇行した川と水の流れ、川の岸に生える植物と川の水面までの距離がとても近いこと等を確認し、湿原の中を流れる川の特徴、街中を流れる川との違いを改めて確認する。

■コッタロ湿原展望台にてトイレ休憩（10:20）

■久著呂川（中久著呂地区）の侵食箇所を観察（11:00）

グループ毎に水の力によって大きく侵食された場所を観察。侵食を受ける前、浸食により次第に景観が変わっていく様子等を写真で確認しながら、ここで起きている問題についてお話。



この川も昔は先ほど見た川の姿のように、曲がりくねっていて、川の両岸にある植物と川の水面との距離は近い姿の川だった。川の横には牧草地が広がっているが、人が生活していくために、数十年前に人の力で川をまっすぐにして、両岸がくずれないようにコンクリートで固める工事が行われた。その後、平成のはじめ頃から少しずつ川の岸や底が水の手で削られはじめ、20年程で川の底が5m程も削れてしまった。今、川の岸は崖のようにになっているが、元々は川の下、地面の下にあった場所がむきだしになっている。川の岸に生えている植物がかつては、川の水面の近いところに生えていた。ここで削られた土砂は、川の水に運ばれて釧路湿原まで運ばれる。そうすると、釧路湿原に少しずつ土砂がたまっていき、先ほど展望台から見えたハンノキという木が増えてしまうということも起こってきた。湿原にだけ生きている植物や動物が減ってしまうということも心配される。このため、この場所から下流に行った場所では、川の幅を広げたり、川が曲がる場所、川の底などに石のカゴを入れたりして、これ以上削られないようにし、次第に自然の石がたまっていくことを期待している。



お話の後、思い思いに川の様子や岸の砂の様子を管理道や法面から観察。

■ 標茶町農村環境改善センターにてトイレ休憩（11:40）

■ 小学校に向けて移動（11:50）

車中にて質疑応答

■ 小学校着（12:25）